édition critique et annotée, sous la direction de M-M. Fragonard et Fr. Roudaut, 3 tomes, Paris, Champion ; je me suis chargé du Livre III (dans le tome 1 ; pp. 508-870) en collaboration avec Madame Marie-Madeleine Fragonard.

45) *La Littérature française du XVIe siècle.* 78 p. dans l'*Encyclopédie Clartés,* 1996.

46) *Calvin et ses contemporains*, Actes du colloque de Paris, 1995, édités par O. Millet, Genève, Droz, 1998.

B. 国家博士論文

『カルヴァンと言葉の力学：改革派レトリックの研究』*1)

望　月　ゆ　か**

本著は、ミエ氏が10年間にわたる研究成果を国家博士論文としてまとめたもので、1990年12月のソルボンヌにおける論文審査の結果、審査員全員一致の称賛を博すというフランスにおける博士論文審査の最高の評価を受けたのち、1992年にパリ、シャンピオン書店より、論文と同じ『カルヴァンと言葉の力学：改革派レトリックの研究』という題で983頁の大著として出版された。私はカルヴィニスムの専門家ではまったくないが、17世紀中葉のカトリック教会内でのポール・ロワイヤルとイエズス会の神学論争の文学的側面を研究している関係で、ミエ教授の著書を知り、大変感銘を受けた。本日は、短い時間内ではあれ、同教授の研究を紹介する機会を森川先生より与えられ、光栄に存じる次第である。

本著の目的は、裏表紙の紹介にあるとおり、「ルネサンス時代のユマニスム修辞学（レトリック）の文脈にカルヴァンの人物像をおきなおす」ことにある。このためにミエ氏の選択した方法論は、パリのコレージュ時代から晩年の著作にいたるまでのカルヴァンの受けた教育、大小さまざまなラテン語・フランス語によるテクスト（但し、大半のテクストに第三者の手が加わっている説教は基本的に除外）を年代順に、修辞学、文体論、言語論的観点から体系的に検討することである。この戦略は見事に成功し、コレージュ時代、法学部学生時代に得た修辞学的素養、セネカや聖ジャン・クリュゾストモスの註解や、いわゆる「回心」以降の聖書註解における文学批評体験が、いかにして後の『キリスト教綱要』をはじめとする神学作品のなかで吸収され、彼独自の雄弁術として発展させられていったかが実に明快に示される。とくに注目すべき点は、カルヴァンのテクストに現れる修辞学の各概念が、古典古代の修辞学理論はもちろん、同時代のフランス系・ゲルマン系ユマニストたちの理論と比較対照されつつ、厳密に定義されていることである。ルネサンスは、ギリシア・ラテンの古典古代文化再生の時代であるが、異教文化とキリスト教とをどのように両立させるかという問題は、ユマニストのキリスト教作家全体につきつけられたディレンマであった。カルヴァンのとった道は、ルネサンスの異教的傾向を古典古代文化の修辞学的遺産そのものによって批判するという、いわばアンチ・ユマニスト的ユマニスムとでもいうべき性格のものである。ところで、ユマニスムの使用言語はラテン語である。中世の「野蛮」なスコラ的ラテン語を批判し、古典古代のラテン語をモデルに最上の文体を再構築しようと、キケロ派、セネカ派、折衷派の間でさまざまなニュアンスの論争が繰り広げられた。俗語

*キーワード：オリヴィエ・ミエ、カルヴァン、レトリック

**日本学術振興会特別研究員

1) *Calvin et la dynamique de la parole : Etude de rhétorique réformée* (Paris, Champion, 1992, 983p.)